

### 3 主な化学物質の用途と有害性

今回の報告で、排出量や取扱量等が多かった化学物質の用途や有害性は次のとおりです。

物質名	主な用途	人に対する有害性
トルエン	合成原料(染料、漂白剤、合成繊維など)、溶剤(油性塗料、印刷インキ、など)、ガソリン成分	薬物依存性があり(いわゆるシンナー中毒)、長期間取り込み続けると、中枢神経機能の障害を起こします。シックハウス症候群との関連も疑われています。
キシレン	合成原料(染料、香料、可塑剤など)、溶剤(油性塗料、農薬など)、ガソリン・灯油成分	高濃度で、眼やのどなどに対する刺激性や、中枢神経に影響を与えることがあります。シックハウス症候群との関連も疑われています。
塩化メチレン	ペイントはく離剤、金属脱脂洗浄剤、エアゾール噴射剤	高濃度で、吐き気、だるさ、めまい、しびれ等の神経系の症状が報告されています。動物実験でがんの発生率の増加が認められ、人に対する発がん性が疑われています。
エチルベンゼン	合成原料(スチレンモノマーなど)、溶剤、ガソリン成分	シックハウス症候群との関係が疑われています。
エチレンオキシド	合成原料(エチレングリコール、界面活性剤など)、殺菌剤	病院で滅菌作業を行っている室内にいた人について、神経系への影響が報告されています。人への発がん性が報告されており、化管法で特定第一種指定化学物質(人に対する発がん性があると評価されているもの)に指定されています。
エチレングリコール	合成樹脂原料(ポリエステル繊維、PETなど)、合成原料(染料、香料など)、不凍液	動物細胞を使った染色体異常試験で陽性を示し、動物実験で腎臓等に影響が認められています。
スチレン	合成樹脂原料(ポリスチレン樹脂、ABS樹脂など)、合成ゴム原料、合成樹脂塗料原料	変異原性試験で陽性を示し、動物実験でがんの発生率の増加が認められ、人への発がん性が疑われています。シックハウス症候群との関連性も疑われています。
テトラクロロエチレン	溶剤(ドライクリーニング、医薬品、ゴムなど)、金属脱脂洗浄剤、代替フロン原料	長期間取り込み続けると、肝臓や腎臓への障害が認められ、低濃度では頭痛、めまいなどの神経系への影響が認められています。動物実験で発がん性が認められ、人への発がん性が疑われています。
トリクロロエチレン	溶剤(生ゴム、塗料、油脂など)、金属脱脂洗浄剤、代替フロン原料	長期間取り込み続けると、肝臓や腎臓への障害が認められ、低濃度では頭痛、めまい、などの神経系への影響が認められています。動物実験でがんの発生率の増加が認められ、人への発がん性が疑われています。
鉛及びその化合物	電池、塩化ビニル樹脂安定剤、顔料	化合物によって毒性は異なりますが、高濃度の鉛による中毒の症状としては、食欲不振、貧血、尿量減少、腕や足の筋肉の虚弱などがあります。無機鉛化合物は人への発がん性が疑われています。